

第4回 伊東市教育問題懇話会 会議録

- 1 日 時 令和6年12月24日（火） 午後2時00分～午後3時18分
- 2 場 所 伊東市役所低層棟 3階伊東市議会第2委員会室
- 3 出席委員 6人（篠原峰子委員、石井照市委員、稲葉雅之委員、関野耕一委員、利岡正基委員、吉田勇輝委員）
- 4 欠席委員 飯塚啓太委員
- 5 事務局 教育長 高橋雄幸、教育部長 浜野義則、教育部次長兼教育総務課長 杉山宏生、教育指導課長 森田まり、教育総務課課長補佐 掬川宗範
- 6 会議の経過

篠原会長：皆さんこんにちは。定刻になったので、ただいまより第4回伊東市教育問題懇話会を開会する。まず事務局より、諸般の報告がある。

事務局：（配布資料の確認）

（配布した資料③に基づき説明）

本日の会議は午後4時までの2時間を予定している。

篠原会長：議題に入る前に、会議の公開についてお諮りする。伊東市教育問題懇話会設置要綱第5条第4項により、会議は公開にて行いたい。御異議ないか。

（「異議なし」の声）

篠原会長：御異議なしと認め、公開により行う。それでは議題に入る。議題(1)「宇佐美地区、旧市街地地区、市街地近郊の住宅地区、対島地区の審議結果の確認について」、事務局から説明がある。

事務局：（配布した資料①に基づき説明）

篠原会長：事務局から審議結果の確認について説明があった。御意見のある方は挙手にてお願いしたい。

委員：1点確認したい。北中は令和9年度の4月、宇佐美地区が令和12年度の4月、対島地区が令和13年度の4月から新学校が開始という審議結果である。北中の学校環境の整備が終わってから宇佐美地区となり、その1年後に対島地区と

なる。宇佐美地区と対島地区の2地区は、同時並行的にいろいろなことを進めていくことができるのか。通学手段や教育環境の整備を含めて、実際この審議結果のとおり市教委として進めていけるのか。

事務局：正直なところ、2地区同時に、進めていくことは難しいと考えている。川奈小と南小の統合には、1年半かかっている。東小、西小、旭小3校の統合は、約2年かけて行っている。川奈小と南小の統合が終了した後に、3校統合について、準備をして手続に入っていることから、同時に進めていくのは厳しいと思っている。現在、教育総務課教育政策係で統合の担当している職員が2人になる。2地区を同時に進めるということになるとすれば、2人体制でなく、5人、6人体制で一つの課を作っていかなければならないと考えている。

委員：今日もまたいろいろな話合いが行われる。市教委から審議結果どおりの学校環境の整備は難しいとの発言があったことを踏まえて意見を言った方が良いのか。それとも、市教委が進められるか進められないかに関係なく、理想論で意見を言えば良いのか。

事務局：事務局の都合は全く考える必要はない。委員の意見に沿って進めていきたいと思っている。それは、子供たちの利益を最優先して学校環境を整えていくというのが、優先すべき事項だからである。ただ、ここまでの話になったので、正直に申し上げると、宇佐美地区と対島地区についての答申は、懇話会の結論を明記しつつも、市教委として適切な判断をした上で進めることを認めていただきたい。

委員：市役所の組織の人員問題という都合で、学校環境の整備時期がずれるということは避けてほしい。何かしらの工夫によって乗り越えていただきたい。子供たちの未来、私達伊東市の未来が、数年遅れるということが決して市役所の組織の人員問題が原因でないようにしていただきたい。

委員：宇佐美地区の留意事項で、9年間の教育になって居場所をなくした児童への対応である。令和12年度には全学年1学級になることが予想されている。今は、部活の都合等に限られているが、人間関係で学校に行くことができなくなったと

きも他の中学に通うことを可能にしたらどうか。

篠原会長：もう少し柔軟な対応ができるように。

委 員：そのとおりである。

篠原会長：他に発言のある委員はいるか。ないようなので、まとめていく。子供たち、私達の伊東の未来を作っていくことが最優先事項であることを考え、事務局には5、6人体制で新たな課を作ることも視野に入れて学校環境の整備計画を進めていただきたい。また、居場所をなくした子供に向けての柔軟な選択肢を設けるという、意見も入れて答申を作成していただきたい。

篠原会長：次に議題(2)基本方針にある「市内中学校は北部と南部の2校程度に統合し、小学校は北部と中部と南部の3校程度に統合する」という構想についてである。事務局から説明がある。

事務局：「市内中学校は北部と南部の2校程度に統合し、小学校は北部と中部と南部の3校程度に統合する」とは、基本方針において中長期的な視点に立った検討事項に記載されているものである。伊東市全体の将来を踏まえ、この構想に限らず、委員の皆様からさまざまな意見を伺いたい。

篠原会長：まず全員から意見を伺う。1人当たり最大3分程度でお願いしたい。事務局へ質問のある委員は、御自身の意見の中でお願いしたい。委員全員の発言後に改めて意見のある委員は挙手をお願いしたい。

委 員：中学校は、宇佐美、南、対島の3校が望ましいと考えている。門野中は南中に統合すると考えた場合、宇佐美は小中一貫校となり、対島も小中一貫校となる。ここ数年の出生数は、200人ぐらいで推移しているが、150人前後になった場合は、宇佐美と南中の2校になると考えている。ただし、将来的には1校ということも考えている。理想と現実はなかなか難しいところがある。小学校は、3校程度にするとすると、北部の宇佐美、南部の対島、大池小、南小、伊東小の統合は大きすぎてできないと思っている。私は宇佐美小、大池小、南小、伊東小、対島の5校が望ましいと考えている。

委員：今日の資料で、2050年までの児童・生徒の推計が出てきた。資料としてももう少し早く欲しかった。以前配付された伊東市の教育を見ながら先を考えた。どこの中学がということではなく、全体的なことになる。これから先を追っていくと、もう10年後ぐらいには、キャパ（収容能力）の問題だけで考えると、少し極端な話なのかもしれないが、市内に小学校も中学校も1校でも収まるのではないかなと思う。伊東市の教育38ページ、園児・児童・生徒数の推移を見ると、小学校は昭和54年度がピーク、中学校は昭和57年度がピークになっている。私が中学校に入学した昭和52年度で約3,000人であり、市内の中学は門野中がなく4校、私が通っていた北中は、1学年当たり300人だったと記憶している。1学年300人で一つの学校だった。1クラス当たり40人以上いた。伊東市の教育で令和6年5月1日現在の表の3歳児は、幼稚園、私立幼稚園、保育園と認定こども園の数を合計すると208人である。通っていない子供もいるし、地元の小・中学校に行かない子もいるのでプラスマイナスはあるが、このまま1学年208人が入学すると考えると、一つの学校の一つの学年で収まるのではないかな。通学の安全性や通学にかかるコスト、教室に入る子供の数、教育の効果など問題があると思うが、これらを加味しないでキャパ（収容能力）だけ言うと、収まらなくもない。3つの小学校が統合するに当たり、通学手段であるスクールバスを手配することが決め手の一つとなったので、この先、統合を進める中で通学手段を確保すれば、宇佐美地区は難しいということもない。3歳児が中学に入学する10年後と考えると、その時期にはもう少し大きな再編が必要である。部活が組めるか、教員に対する子供の数の比率がいかにあるべきかという議論は抜きにして考えると、一つの学校に収まる。新たな建物の取得や改修、新築は、さらに先のことも踏まえた中で、慎重に今からやるべきである。

篠原会長：小中学校、それぞれ1校でも収まるということか。

委員：キャパ（収容能力）だけ言うと収まる。

委員：いくつか案がある。1案目は、今の学校区を踏まえた上で今後考えてい

くとするならば、中学校の2校は厳しいので、3校と思っている。具体的には対島中、中央部の南中、それから宇佐美地区である。小学校は、4校又は5校で対島と宇佐美、そして、大池小、南小、伊東小の3校を基本的には残す、若しくはこの3校の中で統合するところがあれば統合すると考えると、小学校は4校又は5校が、今現在では考えられる。2案目としては、基本方針にある今後中学校2校、小学校3校というのを考えていくと、今の学区ありきで考えるのではなく、居住地ありきで考えたときに中学校は、北部と南部で1校ずつ、旧城ヶ崎分校が今後取得できるなら、旧城ヶ崎分校に中学校を1つと、北中を改修して中学校を2校とする。小学校は、宇佐美、旧城ヶ崎分校、3校目は南小か伊東小若しくは旧伊東高校で、小学校3校は可能であると思う。ただし、自動車通学を可能にしたり、スクールバスを確保したりする必要がある。また、電車通学なら駅の近くに学校を考えていく必要がある。最後の3案目としては、中学校は、1校でも収まると考えるならば、例えば南中辺りに作る。小学校は、通学範囲を考えると、3校でも良いと思う。

委 員：基本方針の策定のタイミングにおいては、「市内中学校は北部と南部の2校程度に統合し、小学校は北部と中部と南部の3校程度に統合する」という構想の中で小中一貫校について記載はなかった。構想の前提が変わってきており、他の委員からもこの構想と異なった意見が出ており、私も異なった意見となる。宇佐美地区は、小中一貫校であり中学校として数えれば一つである。南部地区も、小中一貫校を念頭に置いて議論が進んでおり、一つの中学校である。市街地地区と旧市街地地区は、門野中、北中と南中が統合した学校が、3つ目の学校である。懇話会は、2012年度までの数字で今まで議論してきたが、本日資料③の配布で新たな児童・生徒数も出てきた。2040年で見ると、門野中、北中、南中を合計しても481人である。1学年160人で、5学級、6学級である。どの時期を中長期と見るかによるが、令和22年、令和12年から10年経過しただけである程度、児童・生徒数は減っている。小学校は、宇佐美と対島地区は1校ずつ、旧市街地地区は、伊東小、大池小、南小学校を合わせて2040年、令和22年で770人であ

り、1 学年約 1 2 8 人である。学校の場所が変わると、当然通学の問題が出てくる。通学方法は学校の場所とセットで必ず考えて、方向性を示していく必要がある。

篠原会長：中学校 3 校、小学校 3 校ということか。

委 員：そのとおりである。

委 員：基本方針にある小学校 3 校は、宇佐美を除いて 2 校で良いと思っている。中学校は、1 校又は 2 校で良いと思っている。1 5 年後、2 0 年後の長い目で見たときに、先に学校の場所が決まってい、公表されていれば、通学しやすいところに住むという準備ができるということで、小学校は 2 校、中学校は 1 校又は 2 校で十分といった意見である。場所は北部と南部で、中学は、南中、旧伊東高校周辺か北中のいずれかが良い。伊東駅や他の駅から近い徒歩圏内にあるのが理想的である。

委 員：基本方針の中学校の 2 校を、2 0 5 0 年の児童・生徒数を見て考えた。宇佐美中が 5 7 人まで減るならば、再編を考えなくてはならない。門野中は、いずれ南中と再編が良いと思う。中学校 2 校は、対島地域で 1 校、他の地域で 1 校と考えた。その中学校を起点に考えると、小学校は、宇佐美地区が小中一貫校で中学校の部分が再編となると、小学校の部分も再編になる。小学校 3 校は、1 つ目が伊東小と宇佐美小、2 つ目が大池小と南小、3 つ目が対島地域の小学校と考えた。基本方針の 1 9 ページに「既存学校との統合という選択肢だけでなく、新たに学校を建設し、魅力や特徴のあるカリキュラムの導入により、人材の外部流出を防ぐとともに、市内外からこの環境で子供たちを育てたいと思える学校の検討も必要だと考えています。」と書いてある。この意見は、すごく重要であると思っている。居場所をなくした子供たち、不登校の子供たちのことも考えていかなければいけない。今、国が進めている学びの多様化学校というのがある。これは不登校特例校になる。全国で今 3 5 校設置されていて、国は目標を 3 0 0 校と決めている。学びの多様化学校は、柔軟にカリキュラムを組むことができるようである。カリキュラムを自由に組めるのは、すごく魅力的だと思う。多様な子供たちに対応していくためには、この学校が各地に増えていくことはすごく重要である。統合が進む中で、利活用を検

討しなくてはならない学校が出てくる。伊東市の中に、使われなくなった校舎に学びの多様化学校を一つ設ける、居場所をなくした子供たちにとって良い場所ができるというのも良いと思う。

篠原会長：様々な意見が出た。これまでの意見を聞いて発言のある委員はいるか。

委 員：本日配布された資料の伊東市の児童・生徒の推計値や国立研究所の数値により、中長期的に考えるという視点は大事であり、その議論は避けるべきものではない。例えば、コミュニティセンターみたいな施設が各地区にある。高齢者の人口もこれから減っていくので、施設の活用も今までより減っていく。それでもその地域にないと通いづらく、集まりづらくなる。生活上の介護予防の意味があるので、残していくべきだという意見も一理あり、子供たちの環境においても、参考になる考えではないかと思う。しかし、学校が小規模になることで、子供たちにいろいろな不利益が生じてきてしまうので、その対策として統合、再編を考えるというのがこの懇話会である。その点を踏まえると、地域に通いやすさで残すのは、元々の課題の解決にはならない。なんとなく地域に残って良かったというのは全然違う。先ほど、キャパ（収容能力）の問題だけで考えると、市内に小学校も中学校も1校でも収まると極端な意見を申し上げたが、小中各1校にまとめて、キャパ（収容能力）だけ優先すべきでもないと思う。意見を変えるわけではないが、最終的には中学校1校と、小学校が2校から3校で落ち着くのも良いのではとも思っている。

委 員：先ほど、将来的に中学校は1校と発言した。下田市で令和4年度から中学校4校が1校になった。1校になるというのはインパクトがある。小さい4校の統合であり、伊東市と比較しにくいですが、1校に統合するに当たり、どのような意見があったのか気になったので、下田市教育委員会に問い合わせをした。交通手段についての意見が相当出たようである。スクールバスの導入と、市の通学補助の2点が、統合の後押しになったとのことである。今後いろいろな問題が出てくると思う。

委 員：小中一貫校は一つの目玉である。今の段階では絶対無理だと分かっているが、長期的に考えたときに伊東市の教育として、幼稚園から高校まで全部が一つ

の場所にある学園都市みたいなものがあったとしても面白いと思う。特別支援学校も同じ敷地にある。伊東市の教育として特徴ある学校作りになるといろいろな意見を聞いて思った。

篠原会長：他に発言のある委員はいるか。

委 員：前回の懇話会で小規模特認校の話が出た。池小を小規模特認校として、伊東市は進めてきたわけである。統合する上で、基本的には小規模特認校をなくしていくのか、それとも流動的で決定していないのか。確認したい。前回の懇話会後の新聞記事はインパクトがあり、皆さんが統合に対してすごくネガティブになっている。今の方が良いのに悪い方に進んでいくと捉えている部分がある。池小は、小規模特認校の良さを感じて通わせている方が多い。先ほど、学びの多様化学校の話があった。やはりそういうニーズはある。小規模特認校を維持するという考えがあるならば、本当に行きたい方はその選択をする。地元の方、父兄の方、PTAの方と学校の統廃合にかかわらずいろいろな話をする。富戸小を残したいという話も聞く。小規模特認校については、前回どういう結論になったか確認したい。

事務局：小規模特認校については、前回の議論の中で、どのようにしていくかの結論は出なかった。

委 員：対島地区は、池小と八幡野小と富戸小が一つになり、対島中と小中一貫校が前提でありながらも、小規模特認校をどうするかは横づけになっている状態ということか。

事務局：そのとおりである。

篠原会長：富戸では前回の懇話会後の新聞記事を見て、御意見はあったか。

委 員：いろいろ意見は出た。郷土芸能を含めた意見が多い。

篠原会長：地域の方にはより丁寧に、経過についても説明していく必要がある。

委 員：長年地域で子供を支えてきた、元々住んでいる方で中心になっている方が年々減少しているのかもしれない。郷土芸能は、いろいろな地域で行われていて、価値があるものであると思う。子供たちの将来の教育効果を前向きに考えていこう

という部分とうまく整合性がとれれば良いのだが、非常に難しい問題である。その子供たちが社会人になっていく中で、だんだん社会性が身についてくる。最初は家族の中で、それから保育園、幼稚園に上がって小さな社会で、友達に見守られながらである。小中学校になると見守られ具合が薄くなる。規模も大きくなり、社会のつながりも広がってくる。だんだん慣れてくると、家族その次に地域とのつながりというのは、とても大事であると思う。だから、何とかその良さを活かしつつ、一定の規模を確保する学校に通わせたいという共通した思いがある。住民の方々もそれをよく分かってくれると思う。誰よりも子供たちのことを考えて活動してきた人たちなので、その学校が小さくなっていくことにより、生育過程上で得られる利益を得られないことをよく理解し、協力してくださるのではないかという期待をしながら、再編を進めていくしかない。やはり、地域の方にはしっかり説明をすべきである。

篠原会長：統廃合がネガティブなものではなく、希望が持てるものであってほしいと思う。また、地域の方の理解を得ながら進めていけたらと思う。

委員：私の世代の友達に地域について聞いた意見である。地域のお祭りや、地域に関わるものから離れたいという人が多い。少なくとも私の周りの友達のほとんどは、地域との関わりを望んでいない。なるべく友達や親戚の中で生活をしていきたいという人がかなり多い。もし、自分が子育てするならどの地域にするという話があったときは、言葉が難しいが、地域性がとても強い場所は、なるべく避けたいという意見があった。友達の意見がたまたま偏っただけかもしれないが、こういう意見もあることは伝えたい。

委員：前回の懇話会で、来年度から富戸小で複式学級になる可能性があるという説明があった。統合はまだ先であり、複式学級を回避することはできない。対策として、同じ町で同じ学年でICTを使って遠隔合同授業をしている、鹿児島県の徳之島型モデル事例を見つけた。児童が自分たちの仲間だけでない、多様な意見に触れることができることで、学力の向上と社会性の育成で成果を上げているようである。

子供たちにどのような教育をするかという観点で考えると、ICT環境の整備も検討すべきである。統合してクラスが一定数確保できるようになるまで間、子供たちの通常授業の機会が失われないためにICTを活用してほしい。複式学級になる富戸小と池小は、さまざまな学校行事を一緒に行っている。先生方の苦労が増える。しかし、子供たちの教育環境を整えるという意味では考えていく必要がある。

委員：私も地元で生まれ育ってきて、こんなに人が減って町が寂しくなっていく状況を何十年後に見るとは思っていなかった。ただ、確実に環境が変化している。変化することによって、やはり私達は変化にしっかり適応していかなくてならない。町という単位でも同じである。子供の将来は、町の中心の一つになるものである。子供を取り巻く環境も変化に適応させないと子供の利益が失われてしまう。変化し、適応しなければいけないのは、私達自身の意識なのかもしれないと日頃自分には言い聞かせている。だから、学校の再編により子供たちがいなくなっていることで、にぎわいが失われ、昔の思い出が消えてしまうようなすごく残念なことがたくさんある。しかし、これはやむを得ない。残念だから何とか少しでもその状況を守っていくことに留まっているわけにはいかない。私達はそこを意識していく必要がある。子供の政策に限らずである。

委員：統合は、人数、規模、コミュニティ、学区を一つのパッケージで考えないといけない。長期的な視点においての学校の構想は、なかなか決めきれないと感じた。子供たちの将来を考えると、こういう教育をするために、統合したというイメージを答申に是非盛り込んでほしい。新しく統合する学校はこういう特徴を持ってやっていくというものが示すことができれば良いと思う。また、先ほど、中学校は1校と発言したが、選択肢を残したい（複数校）とも考えた。ある学校に適合できなかったとき、選択肢があった方が良い気がする。複数の学校でそれぞれの特色が出ていると、この学校はこういう特徴があって面白さがあり、楽しい、ワクワクする、そういうイメージのある答申にしたいと思う。

委員：子供たちが夢と希望を持てるようなそういう話合いになっていければと

この懇話会が始まる時も申し上げた。皆さんがおっしゃるように、統合は、マイナスに捉えられるものではなく、やはり夢のある再編という形になってほしいと思う。保護者、地域の方から既にいろいろな意見が入ってきている。児童・生徒数を見ると、やはり統合再編していかなければいけない。時代が変わっていく中で、子供たちや保護者が、夢を持てる良い教育環境を提供するのが大人の役目であると思う。学校教育のあり方も時代とともに変わってきて、GIGAスクール構想は10年前には考えられなかった。鹿児島県の徳之島型モデル事例のようなICT教育もいろいろな取組ができる。楽しみになる学校作りがこれからできていくと思う。10年後にはさらに児童・生徒数が減っていき、10年後の学校教育もガラッと変わっているかもしれない。長期的な学校のあり方について様々な意見が出たが、子供たちが誰も取り残されない教育のあり方がしっかり形になっていく伊東市の教育を望みたい。

篠原会長：他に何か御意見がある方はいるか。

(意見なし)

篠原会長：本日の審議は、以上で終了とする。次に移る。「次回開催」について事務局の説明を求める。

掬川課長補佐：第5回は令和7年1月27日の月曜日午後2時から、低層棟3階伊東市議会第2委員会室で開催する。次にこの場で第6回の日程調整を行い決定したい。

(委員に候補日の説明し、第6回は令和7年2月18日の火曜日午後2時から開催することを決定する。場所は低層棟3階伊東市議会第2委員会室になることを報告する。)

篠原会長：最後に事務局から何かあるか。

事務局：会議録の公開について説明する。会議録のホームページ公開は、会議録への会長署名後になることを説明する。今までの教育問題懇話会で配布した資料について、次回以降も必ず持参するよう依頼する。

篠原会長：これをもって本日の会議は閉会とする。

以 上